

## 学芸員の仕事②上市場馬頭観音の刻銘解読調査（続き）



(写真1)  
上市場馬頭観音遠景

前回のこのコーナーで、上市場地区のセブンイレブン前T字路にある馬頭観音（写真1）の前で黒布をかぶって、碑面に懐中電灯の光を斜めに当てて銘文を読んだと書きました。オモテ面は文字が大きいので、この方法で読めました。しかし碑のウラ面は、この方法では完全には解明できませんでした。

現場で考え込んでいると、太陽の斜光を利用することを思い立ちました。「時間がたつと斜めに日光が当たる」と考えて、いったん資料館に帰って他の仕事をしてから、もう一度現場に戻りました。すると、さっきまでは日が照っていたのに、曇ってしまって日光による陰影で刻銘を解読することが出来なくなっていました。「きょうはダメだ」と思って後日の同時刻に現場に行くことにしました。銘文解読でも何度も現場に行く、いわゆる現場百回です。必ず銘文を挙げるといふ決意で現場に何度も通り、ついに上市場馬頭観音の銘文全体の解読に成功しました（写真2）。

その結果、裏面には二段にわたって人名があり、上段に「久我常治 同初三郎 同茂七 同七造 同定吉 伊丹次三郎」の6名、下段に「中村喜三郎 松崎（以下の文字はコンクリートで埋まり判読不能）小高倉（以下判読不能）池田眞（以下判読不能）御園生（以下判読不能）宮本佐（以下判読不能）伊東（以下判読不能）」の7名の名がありました。これらの人たちは、この馬頭観音の建立に関係した人と思われませんが、現在のところ詳しくはわかりません。ご存知の方は、お知らせください。



(写真2)太陽斜光陰影刻銘解読  
法で見た上市場馬頭観音ウラ面

この馬頭観音の近くに住んでいた久我岩男さん（故人）は、「上市場には馬車屋さんがずいぶんいて、山から木を切り出す、収穫米を運び出す、一ノ宮駅に荷物が着いたなどというときに活躍していました。馬車屋さんの組合があつて、大きな仕事ときには皆で仕事を分担していました。上市場の馬頭観音は、馬車の仕事をやっていた人たちが建てたと聞いています。今でも近所の人たちが大切にして、お水上げ

ています」などと語っていました。

この馬頭観音は一宮町と大多喜町との間の道標も兼ねていて、建立された1912（大正元）年10月当時、すでに上市場地区は現在のように両町との結節地点として重要な場所だったこともわかりました。この馬頭観音は馬が交通手段だった百年以上前から自動車の時代となった今も、行き交う人々を見守り旅人をいざなっています。学芸員は現場が第一で、このたびの調査も現場が教えてくれました。

©無断転載等禁止